

# 組織神学の方法について(1)

宇 田 進

## I

最近一、三〇二頁から成る大著 *Christian Theology* (最初三巻―第一巻一九八三、第二巻一九八四、第三巻一九八五―で出版されたが、一九八六年に一卷にまとめられた) をあらわしたアメリカ福音派の神学者ミラー・ド・エリックソン (Millard J. Erickson) は、一般的に言って、近年、組織神学は「退潮期」にあると指摘している。

いかにしてそのような状況が起こったのであろうか。エリックソンは次のように説明している。まず、世界の神学界を振り返ってみると、第一に、神学者の生命あるいは活動期は、変動が加速的に進行しつつある現代という時代状況を反映してか、ますます短命化しつつある。第二に、代表的な諸学派が次第に姿を消し、いまや組織神学界は多様化の様相を濃くしてきている。第三に、今日、いわゆる神学的巨星といわれる神学者 (たとえばバルトとかブルトマンといったリーダー) の不在という事実がある。現在、話題の神学者と言

えば、せいぜいモルトマンとパネルベルクぐらいであろう。そしてこのような神学界を直撃したのが一種の組織革命とも言える近年の「組織の爆発的增加」と、学問研究の「専門分化」の急激な進行という現象である。研究活動においても、いわゆる「ホリスティック」というより「アトミスティック」な傾向が強くなってきたために、神学者たちは教理体系の全体を扱うことにますます困難を感じるようになってきている。こうした状況のなかで、神学者たちは自ら真理の全体像とか体系的陳述ということよりも個別の主題（たとえばパウロの人間論など）に、また規範的（ノーマティブ）な事柄よりも記述的（ディスクリプティブ）な事柄に、より思考を集中するようにならざるをえなくなった、とエリクソンはみている。

以上の観察は近年の組織神学界の状況を總体的にはほぼ正確に言いあてていると思われるが、福音派の場合はどうであろうか。まず、復興期と言われている第二次大戦期から現在までの時期に目をとめ、その間に出版された主要な文献を系統別、年代順にあげてみると次のとおりである。

### (1) カルヴァン主義系のもの

#### A 改革派・長老派系のもの

Louis Berkhof: *Systematic Theology*, Eerdmans, 1941

Auguste Lecerf: *Introduction to Reformed Dogmatics*, Lutterworth, 1949

(フランス語原著 *Introduction a la Dogmatique Reformee*, 1931)

Abraham Kuypers: *Principles of Sacred Theology*, Eerdmans, 1954

(オランダ語原著 *Encyclopaedie der Heilige Godgeleerdheid*, 3 vols., 1894)

Cornelius Van Til: *An Introduction to Systematic Theology*, Presbyterian and Reformed, 1961

J.O. Buswell, Jr.: *Systematic Theology of the Christian Religion*, Zondervan, 1962

- Herman Hoeksema: *Reformed Dogmatics*, Reformed Free Publishing Association, 1966
- 岡田 稔『改革派教理学教本』新教出版社 一九六九
- G.C.Berkouwer: *Studies in Dogmatics*, 14 vols, Erdmans, 1952-1976  
 (ホトハタ語訳集 *Dogmatische Studien*, 1949-1972 全十八巻の。ベルカウワーの全著作にこらぶれ J.C. De Moor: *Towards a Biblically Theo-Logical Method—Structural Analysis and a Further Elaboration of Dr. G.C. Berkouwer's Hermeneutic-Dogmatic Method*, Kok, 1980 参照)
- E.R. Geehan, ed.: *Jerusalem and Athens—Critical discussion on the philosophy and apologetics of Cornelius Van Til*, Presbyterian and Reformed, 1974
- John C. Vander Stelt: *Philosophy and Scripture—a study in Old Princeton and Westminster Theology*, Mark, 1978
- John Murray: *Collected Writings*, 4 vols, The Banner of Truth Trust, 1976-1979
- Donald Bloesch: *Essentials of Evangelical Theology*, 2 vols., Harper and Row, 1978-1979
- George Marsden: *Fundamentalism and American Culture*, Oxford Univ. press, 1980
- B. Wentzel: *Dogmatick*, 2 vols. (全四巻の二巻) Kok, 1981-1982
- Eugene Osterhaven: *The Faith of the Church*, Erdmans, 1982
- John Davis: *Foundations of Evangelical Theology*, Baker, 1984
- Harvie Conn: *Eternal Word and Changing World*, Zondervan, 1984

春名純人『哲学と神学』法律文化社、一九八四

岡田 稔『改革派神学概論』聖恵授産所、一九八五

David Wells, ed., *Reformed Theology in America*, Eerdmans, 1985

B アンブリーカン系

T. C. Hammond: *In Understanding Be Men*, rev. ed., Inter-Varsity Press, 1986

C バプテリスト派系

ヘンリー・シーセン『組織神学』聖書図書、一九六一

(英語原著 Henry Thissen: *Lectures in Systematic Theology*, Eerdmans, 1949 ドイツ語版 ハイネマン・コーン主義の影響も混在している。改訂版はよりカルヴァン主義的である。)

Bernard Ramm: *The Evangelical Heritage*, Word, 1973

Dale Moody: *The Word of Truth*, Eerdmans, 1981

Bruce Demarest: *General Revelation*, Zondervan, 1982

Carl Henry: *God, Revelation and Authority*, 6 vols., Word, 1976-1983

Bernard Ramm: *After Fundamentalism*, Harper and Row, 1984

Millard Erickson: *Christian Theology*, Baker, 1986

G. Lewis and B. Demarest: *Integrative Theology*, vol. I, Zondervan, 1987

D その他

以上のほか、 Herman Baynck: *Our Reasonable Faith*, Eerdmans, 1956 (オランダ語原著 *Magnalia Dei*, 1909) Bruce Milne: *Know the Truth*, Inter-Varsity Press 1982 などがある。

(2) ルター主義系のもの

Franz Pieper: *Christian Dogmatics*, 4 vols., Concordia, 1950-1957

(ドイツ語原著 *Christliche Dogmatik*, 3 vols., 1917-1924)

カール・ヴィスロフ『キリスト教教理入門』聖文舎、一九六六

(ノールウェイ語原著 *Jeg vet da hvem jeg tror*, 1946)

H・E・シエーコプス『キリスト教教義学』聖文舎、一九七〇

(英語原著 *A Summary of Christian Faith*, 1930)

(3) ウェスレアン・メソヂニアン主義系のもの

Orton Wiley: *Christian Theology*, 3 vols., Beacon Hill Press, 1960

Charles Carter: *A Contemporary Wesleyan Theology*, Zondervan, 1983

(4) デイブリンシャーモン主義のもの

Lewis S. Chafer: *Systematic Theology*, 8 vols., Dallas Seminary Press, 1947-1948

R. Lightner: *Evangelical Theology*, Baker, 1986

(5) 辞典・ハンドブック類

『ズイカー神学辞典』聖書図書、一九七二(英語原著 E.F. Harrison, ed., *Baker's Dictionary of Theology*, Baker, 1960)

Carl Henry, ed, *Basic Christian Doctrines*, Baker, 1962

Carl Henry, ed, *Christian Faith and Modern Theology*, Baker, 1964

John Davis: *Theology Primer*, Baker, 1981

*The Lion's Handbook of Christian Belief*, Lion Publishing, 1982

W.Elwell, ed., *Evangelical Dictionary of Theology*, Baker, 1984

泉田昭、宇田進、服部嘉明、舟喜信、山口昇編『新聖書辞典』いのちのことば社、一九八五

以上のリストは、教理の全般を扱っている組織神学書、福音派の組織神学的な活動や状況を伝えている文献、組織神学におけるプロレゴメナ（序説）を扱った文献に限っているので、教理の各論（loci）を扱った文献は以上のほかに数多くあるわけである。

さて、この時期を振り返ってみると、次の点を指摘できるのではないかと思う。第一に、近年の組織神学界はざぎにふれたとおり一般に退潮期にあると言われているが、福音派の場合をみると、第二次大戦以降エバンジェリカルの「復興期」にあるという教会史的事実（その状況については拙著『福音主義キリスト教とは何か』いのちのことば社、一九八六参照）と符合して、一九三〇年代より第二次大戦時までのいわゆる後退期と比較するならば、かなりの数の文書が生み出されているといえる。第二に、現在アメリカの福音主義研究の第一人者と評価されているマーズデンが、つい最近、アメリカ福音派の学問研究について指摘していることと一致する点々もあるが（George Marsden: "The State of Evangelical Christian Scholarship", *The Reformed Journal*, Sept. 1987）の論文は一九八七年六月に The Institute for Advanced Christian Studies と The Billy Graham Center in Wheaton が共催した "A New Agenda for Evangelical Thought" 会議での基調講演である）、福音派の教義学的研究は圧倒的にカルヴァン主義系のものが多いことがわかる。第三に、従来、福音派は神学方法論が弱いと批判されてきたが、特に八〇年代の活動の中で一つ目にとまることは、いくつかの著作がプロレゴメナと方法論に特別な関心を寄せているという事実である。ヘンリー、

ラム、コーン、デイヴィス、エリックソン、ルイス、デマレストなどの著作にその傾向をみる事ができる。

## II

先へ進む前に、あとあとの検討のためにここで、ホルスト・ペールマンが『現代教義学総説』新教出版社一九八二の中で論じている、教義学の四つの機能について概観しておきたい。第一は教義学の「教會的ないし実存的機能」である。人は、教義学をただ教會の肢として、教會の委託、教會に對する奉仕の意識をもつて行う。教義学的思考は、ただ単に信仰についての思考にとどまらず、むしろ信じつつする思考である、というブルンナーの主張に同意しつつ、ペールマンは次のように述べている。「神の言葉（ロゴス）として、神についての語りとして、その認識対象である神からして、神学は、全く中立的な学問ではありえず、むしろただ実存的にのみ関わりうる学問である。なぜなら神は、あらかじめ神によって捕らえられる(ergriffen)ことなしには、理解(Begreifen)しえないからである。神による先行的捕らえなしに神を捕らえることは、つまりこのように捕らえられることぬきの把握は、神を世界の一部として客観視することになるであろう。神は、確かに神学の対象(客体)ではあるが、しかし、神学の主体たることをやめてはならないのである。したがって神学は、前もって神と語った時のみ、神について語るものである。神賛美でない、とりわけ実践的な知識でない、再生した者の神学でないような神学は、もはや神学とは言えない、せいぜい宗教学でしかありえない」(十二頁)。

第二に、ペールマンは教義学の「再生産的ないしは要約的機能」をあげている。これは聖書の使信あるいは聖書の教えを要訳して捕らえることである。「新プロテスタンティズムにおいて、なおざりにされていた教義学の再生産的機能は、分かりやすく聖書主義的教義学(ケーラー、シュラッター、ハイム)に、またと

りわけ根本主義的（ファンダメンタル）およびすべての保守的教義学の中に強く表われている」とペールマンは述べ、後者の例としてルター派教会ミズリーグループの標準的教義学となったフランツ・ピーパーの著作をあげている（十四頁）。

第三に、ペールマンは教義学の「生産的ないし新理解的機能」をあげている。「伝統的関連以上に重要なのは、教義的神学の状況的関連である。それは――釈義や教会史のように――聖書の・教会的ケリユグマをただおうむ返しに語るのみでなく、むしろまさに新しく語らねばならない。伝統をただ単に要約する（*zusammen fassen*）にとどまらず、新しく理解する（*neufassen*）。…組織神学は、聖書の発言をただ単にモザイクの石のように、まとめて並べるだけでなく、移し並べる（翻訳する）。アルトハウスによれば、…教義的神学のヘキリスト教的真理は、へより初期の形体から新しい形体へと翻訳されることを要求する。へ組織神学は…：…へキリスト教の真理を私たちの今日にふさわしい妥当性に、基礎づけて表現しなければならぬ」（P. Althaus: *D. christ. Wahrheit*, (1947f) 7. Aufl., S.9, 15f) ……：…エーベリングに従えば、へ伝承された信仰の証しを現在に責任を負うべきものとして思考することが、へ組織神学の内容である。へそれは、へかつてそうだったと語るのではなく、むしろ、へ現在こうであると語るのである（…十六頁）。この生産的機能が支配的である神学の例として、ペールマンは北米あるいは南アフリカの「黒人の神学」、ラテン・アメリカの「解放の神学」、メッツなどの「政治的神学」などのいわゆるコンテクスチュアルな神学を紹介している。

第四に、ペールマンは教義学の「合理的ないし学問的機能」をあげている。これは啓蒙時代以来ずっと近代教義学の本質的構成要素となっている批判的学問性（このことが古くから使い古されたものや、真理から魔術的に墨守する遺産をこしらえる非批判的伝統主義に感情的に固着することから、神学を守るとされる）の問題である。今日では、この批判的学問性をどう理解し、どう立証するかに議論が集中している。たとえ



ば、「バルトによると、神学は、(1)すべて他の諸科学と同じように、へ一定の認識対象についての人間の努力であること、(2)へそれ自体の中に首尾一貫した認識方法をとり、(3)へ自己自身ならびに、このような認識方法をとるへすべてのものに、へ弁明をするへ努力をしているゆえに、すでにその学問的性格を十分満たしている(K.Barth: K.D.I/1.S.6) (十九頁)と考えられている。これに対立するものとして、神学が学問としての妥当性をもとうとする場合、すべての学問で問題とされる基準が要求されるとするハインリッヒ・シヨルツの見解がある。シヨルツのいう基準の中には、命題は無前提という意味ではないが偏見のないこと、自然科学的に不可能なことは、神学の学問性にとつても不可能である、といった基準が含まれている(詳しくは同頁参照)。このシヨルツの考え方は、あくまでも近代の世界観と近代の自律的理性による思惟に立ちつつ神学の学問性をさぐりかつ確立しようとする立場であると言えよう。これに対し、ペールマンは「神学ではこうした企図について、あらゆる場合に偏見のなさという要請は、完全には受け入れられない。なぜなら神学は、啓示や信仰の偏見から出発しているから、また神が、神についての学問以前にあり、さらにこの学問は、神学的循環の中に存在するからである」と指摘している(十九頁)。また、近代的思惟の立場に立つて理性的に受容できること、経験可能なこと・体験しうること、利用できること、実存論化しうること、社会的に見うること、有用なことだけを真理だと思ひ込み、単なる実用神学に変質してしまう場合、教義学はその実存的教会的、および再生産的・要約的機能から離れてしまう危険の中に巻き込まれてしまうのではないかとペールマンは指摘している(二十一―二十三頁)。

### III

さて、話を福音派の組織神学研究における最近の動向に戻したいと思うが、八〇年代に出版されたラム、ヘンリー、コーン、デイヴィス、エリクソン、ルイス、デマレストの著作を見ると、従来の組織神学とはかなり違ったアクセントをもって神学方法論とプロレゴメナ問題の探索にあたっているように思われる。前述のペールマンの四機能で言うと、従来、福音派の組織神学は第一の「教會的ないし実存的機能」と、第二の「再生産的ないし要訳的機能」をはっきりと主張してきた。つまり、再生した者による教会に仕える学としての神学と、「聖書の類比」の原則に基づいて聖書の教えの全体像を明らかにするという再生産機能とをほぼ例外なく一致して強調してきたといえる。だがしかし、第三の「生産的ないし新理解的機能」と第四の「合理的ないし学問的機能」についてはどうであつたらうか。実は、八〇年代にあらわされた前出の福音派の神学者たちの著作は、その視角とアプローチはそれぞれに幾分違っているが、皆共通にその第三および第四の機能との積極的な取り組みを特色としている。たとえば、デイヴィスの“contextualization”論（前掲書参照）は第三機能との真剣な取り組みを示しており、啓蒙思想以降の近代理性の立場と近代の学問研究を十分に踏まえたエバンジェリカルな神学方法論の確立を目指すラムの試論（前掲書参照）は、多くの複雑な問題を包含している第四機能の掘削を試みている好例といえよう。

ところで、今日、福音派組織神学の方法論の問題を考える際に、どうしてもみておかなければならない一つの背景的なことがある。それは、古（オールド）プリンストン神学”の中心的形成者であるとともに、広くアメリカ福音派の神学的展開（たとえば二〇世紀のアメリカ・ファンダメンタリズム）に大きな影響を及ぼしたといわれているチャールズ・ホッジ（Charles Hodge, 1797-1878—その生涯については息子 A.A.

Hodge: *The Life of Charles Hodge*, 1886 および、『キリスト教人名辞典』、日本基督教団出版局、一九八七の拙稿「チャールズ・ホッジ」参照。その神学形成と神学的業績については、Ralph J. Danhof のアムステルダム自由大学博士論文—*Charles Hodge as a Dogmatician*, 1929、John O. Nelson のエール大学博士論文—*The Rise of Princeton Theology, a Genetic Study of American Presbyterianism until 1830*、W. Andrew Hofferker: *Piety and The Princeton Theologians*, Baker, 1981、Mark A. Noll, ed: *The Princeton Theology, 1812-1921*, Baker, 1983、David F. Wells 篇の前掲書およびトーマズ・ベンの前掲書と *The Evangelical Mind and the New School Presbyterian Experience*, Yale Univ. Press, 1970・丸山忠孝「プリンストン神学におけるスコットランド常識哲学の影響—チャールズ・ホッジの人間論をめぐって」、『途上』一四号、一九八四などを参照)の神学方法論である。

十九世紀のアメリカ教会史に属することになるが、一八〇七年にまずアンドーバー神学校が、そして五年後の一八一二年に史上二番目の主要な神学校としてプリンストン神学校が設立されることによって、今まで個人的にかゝるいは“college”(たとえば十八世紀以来の Yale College などがその一例)によってなされてきた神学教育が“seminary—神学校”時代に入ることになる。そのプリンストンにおいて初代の神学教授に就任したのが、故郷ヴァージニアでのリバイバルの指導者としても知られ、のち一世紀間にわたるプリンストン神学の枠組を据えた神学者ともいわれているアーチバルド・アレギザンダー (Archibald Alexander, 1772-1851)である。彼は四十年間在職し、その間に彼の薫陶を受けた神学生数は一八三七人にのぼったといわれている。神学的には、十六、七世紀のヨーロッパの改革派神学者たちと、ジョン・オーエン、ジョージ・ホイットフィールド、ジョン・ササン・エドワーズなどの英米の神学者たちの神学思想に深い尊敬をもって親しんでいたが、クラスではトレティーニ (Francis Turretine, 1623-1687) の *Institutio*

*Theologicae Elencticae*, 1679-1685) を教義学の最適の教科書として用いる一方、スコットランド常識哲学のトーマス・リード (Thomas Reid, 1710-96) やジェームズ・ビーティ (James Beattie, 1735-1803) 主著に *Evidences of Christianity*, 1781 あり) には特別深い関心を寄せ、その思想を思弁的な諸哲学と誤った神学思想を論駁するための弁証論上の道具として用いている (詳しくはヴァンダーステルトの前掲書 九〇—一四頁参照)。ある日、このアレギザンダー教授がプリンストン・カレッジの校庭を散策していた時、ギリシャ語の発音と盛んに格闘していた一学生のチャールズ・ホッジに心ひかれたと伝えられている。それがきっかけとなり、のちに教授の暖かい交わりと指導とによつてホッジは献身の道へと導かれたということである。彼は新設のプリンストン神学校を一八一九年に卒業し、のち按手を受け、一九二二年にサムエル・ミラーについて三人目の教授として母校に迎えられた。在職中、一九二六年から二年間、ホッジはドイツに留学し、ハツレ大学ではトールックやゲゼニウス、ベルリン大学ではヘングステンベルクやネアングラーの下で研究を積んでいる (シュライエルマハーとも接触を持った) が、一八七八年天に召されるその年まで実に五十年以上にわたつて教授職にあり、ひたすら伝道者の教育にあたった。彼の訓育を受けた神学生数はなんと三千を越えていると伝えられている。

当時、アメリカ長老派内には二つの流れが存在していた。一つは神学上の歴史的純正性を強調する「旧学派」(ペンシルヴァニア地方と南部に分布) と、他は文化への適応や神学的な巾の広さを特色とする「新学派」(ニューヨーク地方と中西部に分布) である。プリンストンはいつてみると前者、つまり「旧学派」の神学的拠点の位置を占めていたと言える。ホッジはそのプリンストンにおける大黒柱的な存在であった。主要な著作としては以下のものがある。

- A Commentary on the Epistle to the Romans.* Philadelphia: Grigg & Elliot, 1835.  
 Erdmans, Grand Rapids; Banner of Truth, London 卹 堅
- The Constitutional History of the Presbyterian Church in the United States of America.*  
 Philadelphia: Presbyterian Board of Education, 1840.
- The Way of Life.* Philadelphia: American Sunday School Union, 1841. Baker, Grand Rapids; Banner  
 of Truth, London 卹 堅
- A Commentary on the Epistle to the Ephesians.* New York: R. Carter & Bros., 1856.  
 Baker, Grand Rapids 卹 堅
- Essays and Reviews: Selected from the Princeton Review.* New York: Robert Carter & Bros., 1857.
- An Exposition of the First Epistle to the Corinthians.* New York: R. Carter, 1857. Erdmans, Grand  
 Rapids; Baker, Grand Rapids; Banner of Truth, London 卹 堅
- An Exposition of the Second Epistle to the Corinthians.* New York: R. Carter, 1857.  
 Baker, Grand Rapids; Banner of Truth, London 卹 堅
- Systematic Theology.* New York: Charles Scribner's Sons, 1871-1873. Erdmans, Grand Rapids; J.  
 Clarke, Cambridge, Eng 卹 堅
- What is Darwinism? New York:* Scribners, Armstrong, and Company, 1874.
- Conference Papers.* New York: Charles Scribner's Sons, 1879. as *Princeton Sermons*, Banner of  
 Truth, London 卹 堅

なかでも一般には『組織神学』全三巻がホッジの名著と受け取られているが、これは七十才を越えたホッ

ジ晩年の作であり、それまでになんと約一四〇篇にのぼる論文・評論を書いている。ホッジはむしろその中で、エールのナサニエル・テイラー、アンドバーのモーゼス・スチュアート、オーバリンのチャールズ・フイニー、ハートフォードのホーレイス・ブッシュネルなどによる同時代の神学諸説に対して正統説の論陣を張ったのであった。参考までに、ホッジのそれらの論文に関して次のようなインデックスがあるのでリストしておきたい。

*Biblical Repertory and Princeton Review. Index Volume from 1825-1868.*

Philadelphia: Peter Walker, 1870-1871

Kennedy William: "Writings about Charles Hodge and His Works. Principally as Found in

Periodicals Contained in the Speer Library of Princeton Theological Seminary for the Years

1830-1880" Typescript, Speer Library, Princeton Seminary, 1963

Princeton Seminary "Authors of Articles in the *Biblical Repertory and Princeton Review*" Typescript,

Speer Library, Princeton Seminary, 1963

今日、ホッジの神学方法論・プロレゴメナをめぐって、もっとも議論が集まっている点は次の三点であろう。一つは、ホッジが自らの方法として採用したベーコンの科学的帰納法の問題である。この点は、今日、神学の方法としてのコンテクスチュアリゼーションの提唱との関係で議論されはじめている。もう一点は、聖書の無謬性・無誤性をめぐる最近の議論の中で問題とされはじめたホッジの真理概念と認識論の問題である。第三点は、スコラ主義的残滓を清算して弁証学の再構成を計ろうとする福音派内における "Presuppositionalism" との関連で論じられているホッジの理性観の問題である。これらの三点の問題は、つまるところトーマス・リードを中心として十八世紀末から十九世紀にかけてスコットランドに発達した、「スコット

ランド学派」とか「常識学派」(The Scottish Philosophy of Common Sense)と呼ばれているイギリス哲学の主流を成した一学派の影響問題である。実は、ホッジがプリンストン・カレッジ時代にアシユベル・グリーン教授 (Ashbel Green, 1762-1848) より学んだ哲学は常識学派のそれであり、ジョン・ウイザーズプーン (John Witherspoon, 1723-1794) の著作には深く傾倒していたと伝えられている。またプリンストン神学校時代にアレクザンダー教授を通して教わった哲学も同じスコットランド常識学派のそれであった。

まず、第一の問題であるが、かのフランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561-1627) は、われわれは、自分の内臓から物事を織り出す蜘蛛 (くも) のようであってはならず、また、物を集めるだけの蟻 (あり) のようではあってはならない、われわれは集めるとともに整理する蟻 (はち) のようではなければならないと言った。ベーコンは、この言葉からわかるように、データをよく集め、それらを秩序正しく整理分類しさえすれば、正しい原理は明白となってくるし、また真理に到達しようとさえ、単純枚挙による帰納よりもより優れた種類の帰納法を確立することによって科学的研究の基礎を据えようとしたのであった。

ところで、当のホッジは神学をどのように捕らえ、どのような方法によって神学の構築を考えたのであろうか。彼は『組織神学』第一巻、一―二章で、彼の基本的な考え方を被歴している。第一に、自然科学が自然の事実 (facts) と法則 (laws) とを取り扱うように、神学も聖書の事実 (facts) と原理 (principles) を取り扱う。第二に、前者は外界の事実を注意深く整理し、体系化し、かつそれらを規定しているところの法則を確定することを目指すように、後者、つまり神学も聖書の事実を注意深く整理し、体系化し、それらの事実の根底にある原理とか、それらの事実が明らかにしている永遠の真理を確定することを目指す。第三に、自然の事実を相互に関係づけ、すべてを統括している秩序は、われわれが自分の考えによって主観的に決めることのできるものではなく、あくまでも事実の分析と吟味とからひき出されるべきものであるように、聖書

の場合も同じである。神学はあくまでも聖書の事実を分析吟味し、それが示している真理の有機的体系の全容を明らかにすることをその主たる任務としている。以上の点を指摘しながら、ホッジは組織神学を“the exhibition of the facts of the Bible in their proper order and relation, with the principles or general truths involved in the facts themselves, and which pervade and harmonize the whole” (p.19)と定義している。これらの主張点から、ホッジが神学の研究を基本的には自然科学の研究とアナロジカルに考え、ペーコン流の帰納法をその方法として採用していることは明らかである。特にホッジは、その方法をあらゆるタイプの思弁的方法 (the speculative method) と神秘主義的方法 (the mystical method) とに對置させて強調している。前者の例としては、シュリングの哲学的思惟に沿ってキリスト教教理の解明に向ったドイツのカール・ダウブ (Karl Daub, 1765-1836 — 主著 *Die dogmatische Theologie jetziger Zeit*, 1833) と、ペーゲル学派に属するフリーリップ・マールハイネケ (Philipp Marheineke, 1780-1846 — *Grundlehren der christlichen Dogmatik*, 1819 の著者) ‘およびかの代表作 *Das Leben Jesu Kritisch bearbeitet*, 1835-36 で知られているダーフィット・シュトラウス (David Strauss, 1808-74) をあげている。後者の例としては、教義に先行するキリスト教的敬虔自己意識あるいは絶対的依存感情 (schlechthiniges Abhängigkeitsgefühl) を中心として、信仰の学、(Der christliche Glaube, 1821) をあらたに提唱したフリードリヒ・シュライエルマハー (Friedrich Schleiermacher, 1768-1834) をあげている。ホッジが一番重視していたことは、アプリアオな仕方での理的思惟によってある種の原理なり理念なりを措定して真理の解明を試みる思弁的な立場と、神の言の絶対的主権性を見失って神と関係するものとして自己を意識することを意味する絶対依存の感情を土台とする内面的な体験主義や神秘主義の立場を排して、聖書の事実の注意深い精査によってキリスト教の客観的真理を確保することであったとみられる。そして、その達成のためには、アポステリオリなペーコン的方法を最上の



方法と判断した」とマーズデンは Theodore Bozeman: *Protestants in an Age of Science*, 1977, George Daniels: *American Science in the Age of Jackson*, 1968, Herbert Hoven-Kamp: *Science and Religion in America, 1800-1860* 1978 および John Stewart の Ph.D 論文 *The Princeton Theologians: The Tethered Theology* などの研究に言及しながら指摘している (*Fundamentalism and American Culture*, pp.15, 111-2, 227)。

また、マーク・ノールも同じ方法を最初に提唱したアレキザンダーの *Nature and Evidence of Truth*, 1812 に酷似している事実を指摘している (前掲書, p.124)。以上のようなホッジの立場は、前述のペールマンの分類で言うところ、組織神学を聖書の教えを要約的に捕らえ、一つの体系にまとめあげるといって再生産的な働きを中心として考える立場の典型的なケースと言える。今までの福音派の組織神学は大体においてこの型のものが多かった。しかし、最近、「コンテクスチュアル」なアプローチの重要性に気づいたデイビスなど一部の若手神学者たちは、「ホッジ的アプローチにおける組織神学の展開の non-contextual, ahistorical, non-temporary な性格に問題を感じはじめている。この点については最近の動きをとりあげる次回少し詳しくふりたいと考えている。

次に、最近、聖書の無謬性・無誤性の問題との関連でホッジの真理概念と認識論があらたに論議の対象となっていることに目をとめる必要がある。まず、真理概念の問題であるが、ホッジが属し、プリンストンを拠点としていたアメリカ長老派内の「旧学派」は、民族的にはスコットランド・アイルランド系の背景を持つていた。そしてその流れにおいては、敬虔な生活実践が強調される一方で、精密に体系化、組織化された教理が重んじられた。そのような伝統は、具体的にはウェストミンスター信仰告白と大・小教理問答の重視と、それに基づく教会教育の実施という形で維持されていった。こうした伝統との関連の中で、旧学派は特定の真理概念を保持していたとする見解が今日次第に広がりつつある。すなわち、旧学派によると、真理を

つかむ上でもっとも根本的に重要なのは事実（事実こそ客観的公平さ）インパーシアリティーを保障すると考えられていた）であり、もっとも純粹な形における真理は言語をもって明確に叙述された命題であると考えられ、そのような真理概念が信仰告白の取り扱いはかりでなく、聖書の無謬性の理解にも適用されたとみられている。実は、以上のような考え方は、さきにふれたスコットランド常識学派の哲学における考え方と一致しているのである。この両者の類似と一致について、長老教会の発達と常識学派の発達とがともに同じスコットランドにおいてであった点も忘れられてはならないが、プリンストンにおいてこの常識学派の哲学と旧学派のカルヴァン主義神学との直接的な出会いと「アマルガム化」が起こった事実注目しなくてはならない。一七六八年に、スコットランド長老教会の教職ですぐれた教育者でもあったジョン・ウィザーズがプリンストンカレッジの学長として迎えられた。彼は一七五三年には常識学派の考え方が自らの基本的立場であることを表明した論文を母国であらわしているが、学長就任後彼はプリンストンからパークレーの観念論哲学の影響を取り除き、その代わりにリードやビーティーの常識哲学をその中心に据えた(*Lectures on Moral Philosophy, 1822*)。そして、のちに設立されたプリンストン神学校においても同じ常識学派の哲学が支配するところとなったのである。この哲学は、十九世紀の中葉までには、プリンストンの垣根を越えて多くのアメリカ人の思惟様式として受け入れられていった。

他の一面は認識論の問題である。常識学派の考え方によると、われわれが知覚や感覚で受け止めるものは外界や事柄に関する認識する者の観点や視点(*point of view*)に基づく概念(*ideas*)ではなく、外界や事柄そのものであると考えられている。また、人間の記憶も同じように一定の観点に基づく概念ではなく、過去の出来事そのものであると考えられている。今日、ホッジを筆頭とする古プリンストン神学は、その聖書論、ことにその無謬性論の構築にあたって以上のような認識論を下敷として用いたのではないかと考えられている。

る。詳しくは次回において触れてみたい。このような考え方は、事実あるいは事柄とそれの報知もしくは記憶との間には、そのことを観察し報知もしくは記憶する者の観点というものが必ず介在しており、そのことは報知とか記憶とか認識に少なからぬ影響を及ぼすとする近代の考え方と異なっている（以上の点との関連でJ・パッカーとM・ノールの指摘は注目すべきである。ノール編前掲書一七〇―八頁参照）。

第三の問題はホッジの理性観である。次回、古プリンストン神学におけるスコットランド常識哲学の聖書論への応用にふれる際に少し詳しく解説したいと思うが、まず、基本的なこととして、アレギザンダーもホッジとともに、人類あるいは生来の人間（ヴァン・ティル式に言えば“natural man”）の「コモン・センス」（*common sense perceptions*）は信頼できると考えていた点に注目すべきである。このような考え方は、人間に普遍的な共通の意識としての常識を究極の原理とし、それを学的認識の基礎真理の査定の基準とすると考える常識学派の立場と符合するものである（S.A.Grave: *The Scottish Philosophy of Common Sense*, Greenwood, 1973）。そして、このようなコモン・センスへの信頼の立場は、次のようなホッジの理性観と完全に調和していると言える。ホッジは、宗教の問題を扱う上での人間理性（自然的理性と再生的理性といった区別以前の人間一般の理性）の正しい職務として、①啓示の受容（*the Usus Instrumentalis of reason*）、②啓示の可能性あるいは確実性の判定（*reason as Judicium Contradictiois*）③啓示を実証する諸証拠の判定（*reason as judge of the evidences of a revelation*）の三点をあげてゐる。（*Systematic Theology*, vol. 1, pp.49ff.）。

今日、以上のような理性観に関して、カイパーの未再生者と再生者といった二種類の自己意識から生じる二種類の学という洞察に基づきながら、ヴァン・ティルを中心として発達した“presuppositionalism”の立場から種々批判が出され、合わせて福音主義的理性観の再構成ということが試みられてきている。はたして

スコットランド学派の立場を継承しているとみられているホッジの理性観はスコラ主義的なものであるのか？  
この問題についても次回ふれたいと思っている。

(組織神学担当)